全国個性化
教育研究連盟

全個教連会報

第４０号

発行
平成９年１月２５日

発行責任者
染田屋謙相

ウィリアム・パイナー氏を迎えて

東京学芸大学教授　浅沼　茂

この度、日本学術振興会の招きにより来日した、ルイジアナ州立大学のウィリアム・パイナー教授を迎え、年末の研修会の講演会をしていただきました。パイナー氏は、ハイ・スクールで２年ほど英語を教えながら、弱冠２４才にして博士号を取得した努力家です。彼のこれまでの業績は、ベトナム戦争にいたるまでのアメリカの教育界における理論を塗り替えるべく、行動目標的方法や教科中心の構造主義的なカリキュラム開発を批判して新しいパラダイムの構築を目指し、パイナー氏自身の「自伝的方法」を含む、多様な立場の人々の業績をまとめあげようとしたことにあります。現在のアメリカのカリキュラム学の状況は、ベトナム戦争以降として時代区分ができるほど、それ以前のカリキュラム理論とは、大きく趣を異にしております。それまでのカリキュラムに関わるパラダイムの多くは、アメリカ中心の世界観に対して反省のない、効率のみを追求する「工学的」な発想に基づいていました。アメリカの経済的繁栄とベトナム戦争までの戦争を勝ち抜いてきた自信は、かつての日本のように技術的な合理性ばかりを追い求め、それが結果として何をめざし、なにをもたらしているのかという問題を考えさせるような理性を欠落させてきたのです。

不思議なのは、日本においてはこのようなパラダイムが、形成的評価だの、診断的評価というような名前で、さも人間評価の切り札であるかのように、教育の現場で、その起源も知らずに応用されていることです。それはそれで、おもしろい現象だと思いますが、この問題一つを考えるだけで、特殊日本的状況が浮かび上がります。前世紀以来アメリカでは、学校で「何を」教えるべきかということは、固定した標準がないかわりに、いつも、それをどのように選ぶかということが議論の的になってきました。この議論は、また学問として常に、教育学の中心的な課題でありました。

それに対して日本では、カリキュラムはお上が決めてくれるものという固定観念があり、何を教えるべきかという議論よりも、決められてことをどう教えるべきかという議論ばかりがさかんでありました。ヘルバルト主義は、日本の教育方法の質を標準化と画一化を進める道具として使われてきました。このような教育文化は、現代も連綿として受け継がれており、観念を現実の物や出来事と結びつけ、自らの思考や発想を常に革新していくというような学習機会を奪い、自らが学ぶ内容について、自らが吟味するというような学習者の主体性を剝奪してきたのです。現在も、カリキュラムの内容についての判断を誰かにあずけてしまう傾向は強いのです。

このような日本の教育の現状ですから、根本的な問題を考えるよりも、登校拒否やいじめの問題があると、あわててカウンセリング関係の予算をつけたりするというような、技術的な合理性でのみ問題を片付けようとするのです。一つひとつの問題が出るたびに対処療法的に個別に相談する、このような形の「個別化」路線も必要かもしれません。けれども、このような対処療法的に個別に相談する、このような形の「個別化」路線も必要かもしれません。けれども、このような対処療法を推し進めていったらどうなってしまうのでしょうか。国民の一人ひとりが実は、同じような悩みを抱えた病人であるということに気がついた時、カウンセラーを含めて、国民の皆が患者で、いったい誰が、誰を治療するのだというようなことになってしまいます。私たちは、特別の治療室を設けることではなく、ふだんの教育実践のなかで、個々人の個性に根ざした人間教育を目指す必要があります。このような個性化は、カリキュラムの内容を私たちが主体的に考えることによって可能になるのです。パイナー氏の自伝的方法は、このような個性化の極を示したものです。自分が学習の主人公になるということ、このことが現代のカリキュラムを考える上で、まず第一に考えられるべきことなのです。

現在のアメリカには、日本のまねをしてナショナル・カリキュラムを作ろうという働きがあるではないかという物知りの方もおられるかもしれません。けれどもそれは、どのような人たちが、何のためにそう主張しているのかということを、検討してみる必要があります。それには、１９８０年代以降、日本やアジアとの経済競争に負けてはならないという経済的な動機が背景にあります。たしかに、しっかりした工業製品を作り、時間通りに安心して乗れる乗り物で移動できるということは大切かもしれません。しかしながら、自分たちの生活の足元を見失った、社会的属性や労働の外化された製品によってのみ評価されてしまう人間の生き方とはいったい何なんでしょうか。パイナー氏は、個人史のなかに、このような人間疎外を克服する自己実現の方法を託しているのです。

第１１回　全個教連学期研修会

【テーマ】　総合学習の考え方・進め方

【期日】平成８年１２月７日（土）・８日（日）

【会場】東京都　上智大学校内

今年の三学期の学期研修会は晴天のもと、上智大学で１２月７日、８日の２日間に渡って行われた。２００人を越す方々が集い、総合学習について熱心に話し合った。

１日目は、ルイジアナ州立大学のウイリアム・パイナー教授を講師に迎え、「アメリカの総合学習」に関する講演、２日目は加藤先生、高浦先生、浅沼先生、奈須先生によるシンポジウム、東京学芸大附属大泉小と久原小学校の実践報告が行われた。

１２月７日（土）　［第１日目］

パイナー氏の講演

個人の主体性の回復のための自分史のすすめ

――パイナー氏の自伝的方法について――

パイナー氏の自伝的方法は、自分の生きている内面の世界に背を向けて、現実の外にある社会構造や制度に身を預けてしまい、そのようなシステムに寄り掛かって生きていけば、自分の心の中では何の葛藤もなく実践がうまくいくような楽観主義を戒めています。パイナー氏の自伝的方法は、教育者として、生徒をどのように社会構造の中にうまく適応できるようにさせるかというような治療の手だてを表したのではありません。それは、個人の主体性を損なう社会中心主義に対する強烈なプロンテストであります。現代人が、現代社会で評価されるのは、社会システムにいかに順応し、そのなかで決められたノルマをこなし、どれだけ成績をあげたのかというような基準に基づいています。学校での評価のシステムも結局、このような基準に基づいています。学校においても社会においてもこのような基準が支配している限り、一人ひとりの生き方や個性というものが、その歯車としての働き具合によってのみ評価されることになっています。

パイナー氏の自伝的方法は、いろいろな解釈が可能ですが、授業の方法の改革を示したものではありません。それは、生徒に先立ち、教師自身がまず、自分を振り返り見て、社会のなかに組み込まれてしまっているような生き方を見つめ直し、自らの主導権を確立することを説いたものです。

最後に、永地先生のコメントは、自分史はけっこうサラリーマンの世界では、はやってきたとコメントされました。先生は、個々人が自分の一生を振り返って見たとき、何が自分の世界にあったのか、自分のものが何もなかったときの空しさが、会社人間としてのサラリーマンは身にしみて実感するからだと述べておられました。このことは、なにもサラリーマンに限ったことではありません。教育者としてつい自己を見失って、集団の中に埋没してしまう私たち教育者自身の反省でもあります。このような意味で、パイナー氏の自伝的方法は、現代の日本人の個性を考えさせられる一つの重要な材料となります。　（浅沼　茂）

１２月８日（日）［第２日目］

シンポジウム

「総合学習の進め方・考え方」

上智大学文学部教授　加藤　幸次
国立教育研究所室長　高浦　勝義
東京学芸大学助教授（司会）　浅沼　茂
神奈川大学助教授　奈須　正裕

４人のシンポジストの要旨は以下の通りである。

Ａ加藤先生―総合学習の分類・整理
①「教科」総合学習　④「トピック」総合学習
②「合科」総合学習　⑤「個人」総合学習
③「学際的」総合学習
教科中心　生活・経験中心

Ｂ高浦先生―（加藤先生の分類を引用しながら
教科ごとのカリキュラムを見直し、カリキュラムや学校全体を変えていく必要がある。

Ｃ奈須先生―カリキュラム編成の原理（Ⅰ文化遺産の継承・発展　Ⅱ子どもの生活）から総合を考えて行くべきである。教科と総合は対立しない。相互補完的、相互促進的である。

Ｄ浅沼先生―「求め」というが、本当に子どもの求めになっているのかどうか、考えてみる必要がある。教師の求めになっていないか。

それに対してフロアからは、「高校にも個性化教育を広めてほしい。なぜ中学で止まるのか」「テーマ学習のテーマ設定の方法は。」「統合と総合の違いがしっくりこない。」「何のために総合をするのか。その目的は。」といった現

場からの不安も交えた意見が出された。シンポジストからは、「現在の教科の原理でなく組み替えた原理で、子どもの統合化を目指していく。」「今は、生き甲斐を感じられるような教科にしていない。生きている学問の営みに参加していくことが必要である。」「問題解決学習を強力に進められるか。子どもの深まりは目に見えるものではないのではないか。」「今、基礎基本が問われている。どういう点で自分の勉強とつながっているのか、考えてみる必要がある。」などの答えが寄せられた。中教審の答申が出されたこともあり、総合学習に対して、熱い期待と不安とが現場では入り交じっているが教師が教科、あるいは子ども、何れの立場に立って教育を考えていくのかが大切だと感じた。

（中田　泰志）

実践報告①

「東京学芸大学教育学部附属大泉小学校」

石井　正広教諭
喜名　朝博教諭

今回の学期研究会には、団体会員である学芸大学附属小に実践発表をお願いすることができた。（因に、現在、国立大学附属学校で全個連の団体会員になっているのは、秋田大学附属小研究委員会、学芸大学附属大泉小、香川大学附属坂出中、の３校であり、国立大学附属学校教官の個人会員は、全国で３人である）

いずれにしても、全個連の学期研究会で「あの！学芸大附属大泉小の実践が聞ける（時代になった）」というのは、なかなか画期的！なことだし、いろいろな面で喜ばしいことだと私は思うのだが、如何であろうか。（ちょっとミーハーかな？）

閑話休題。大泉小のお二人の先生、石井先生、喜名先生の提案は、概略以下のようであった。

1、何のために「総合学習」を行うのか、

「豊かな学力」を育成するためである。

「豊かな学力」とは、社会の変化に主体的に対応するために「生きてはたらく力」とは「豊かな心」と「確かな学力」から形成される。

そして「確かな学力」とは、「内容知」（何を学ぶか）「方法知」（問題追求のためにどのような方法を使うことができるか）「自分知」（何を学び、それをいかに学んだか、それが自分にとってどのような意味を持つのか）、の三つの知からなると考える。

この「生きてはたらく力」育成のために、三つの知で各教科の授業を見直すとともに、教科の枠を取り払い、子供の生活に密着した学習内容を選定して、子供たちの生活と学習を結び付ける場として、総合学習を設定するのである。

2、附属大泉小の「総合学習」とはー割愛

3、附属大泉小の「総合学習」の実際ー割愛

大泉小の実践について「詳しく知りたい！」という方、直接大泉小に問い合わせるか（１月24日に研究発表会があったそうです）、または、全個連研修部（代表大磯小）宛ご連絡ください。

（池田　伊三郎）

実践報告②

「福岡県久山町立久原小学校」

総合学習「ちゃぷちゃぷ夢ランド」

竹内　祐子教諭

６羽の子鴨の死から実践のゴールが見えないままはじめた池作り、子供たちが考え、選んだ設計、子供たちで考え選んだ「ちゃぷちゃぷ夢ランド」自分たちで作っていく楽しさを一人一人が味わうことができる総合学習の発表であった。

ボランティアの協力のもと、土曜日曜をつかっても、ボランティアのためにお茶菓子まで用意してくる子供たち、夢ランドに植える木の選定ひとつでも子供たちは、鴨や池の環境を考えて進めていった。

「池掘りで何の力がつくのか？」と言われるけれど。たかが池掘り、しかし、活動から生み出される様々な事象の中に教育意義をもっている。それは、子供たちの様子から明白である。子供が、人や物など回りの環境と相互作用をすることにより、そこから、身につく力ははかりしれないものがある。「ちゃぷちゃぷ夢ランドを作ろう」という総合学習はそんな活動であった。

ちゃぷちゃぷ夢ランドをつくった子供たちが、今はもう高校生とのこと、その子たちのこの学習に対する感想には、思わず目頭があつくなるとともに、このような学習の持つ教育的意義を再認識する発表であった。

発表の中では、町の行政を含め地域の協力が顕著であった。

まさに、地域を上げて子供たちを育てている様子がさらなる感動をよんだ。

ここまで、地域との信頼関係を作り上げた先生方の苦労と実践があっての久原小学校であると思われる。

このような実践の積み重ねが個性を重視した教育につながっていくのであると実感した。

（多田　信夫）

研修会のまとめ

上智大学　加藤　幸次教授

加藤先生は、カリキュラムの三つの語義から説き起こして「如何にして子供の意欲のもとになる課題を創り出すか」といった内容に関したお話をされ、現場人のニーズを配慮した体裁で「まとめ」をされていた、と感じられた。

けれども、私は、先生の「まとめ」を聞きながら、そのお話の背後に込められている（先生が最近のいくつかのご著書で繰り返し論述されている）先生の「主張」を思い起こし、その「主張」の主旨について再度確認しておく必要があると強く感じた。そこで、この場を借りて先生の「主張」の一端を紹介させて頂く。

加藤先生は、９５年に明治図書からだした『個別化・個性化教育はどこに向かうべきか』（オピニオン草書16）の中の「２１世紀こそ「児童の世紀」にしたい」という章において、えられるべきであろう。概略次のようなことを提言しています。

２１世紀に向けて、教育が成し得ることは、人類の新たな課題に果敢に挑戦していく「創造力」を育成することである。そして、「創造力」とは、一人の人間として創造的に「生きていく力」をも意味している。

教育は、本来、「人格の完成」とか「幸福の追求」或は「自己実現」とかいった個人レベルの目的を持っているはずである。教育は、他の目的に対する「手段」として位置づけられると同時に、それ自体「目的」であるべきである。

従来の教育は子供を知識や技能の「受容器」とみなしてきたきらいがある。そうではなく、「一人ひとりの子供は自分の世界を切り開く力を持っている」と捉え直すことが必要である。ひとりの子供（人間）は、小さな言語学者であり、数学者であり、科学者であり、同時に芸術家であり、制作者なのである。…このことに注目し、そこに「創造力」を育成する契機を見るべきであろう。また、９６年１１月に出したばかりの『学校五日制と教育課程の創造』（黎明書房）の中の「２１世紀に生きる子供たちのための教育課程を問う」でも、前掲の内容に関連した内容を敷えんした後、以下のように論述しています。曰く、…２１世紀世界にふさわしい新しい教育課程は、アプリオリなグローバル問題と子供の主体性の間の統合をどのように図るか、という大きな問題に当面する。結論的に、教育課程についていえば、「総合学習」というあり方を求めざるを得ないはずである。子供たちの疑問がカリキュラムの中核にあって、しかも子供たちの疑問が次の疑問を呼び起こすという「コース」にあって、この二つは統合されていくものと考えられるべきであろう。

（池田　伊三郎）

研究発表会報告

①「山形県寒河江市立寒河江小学校」

研究主題「生き生きと学び続ける子ども」

…指導の個別化と学習の個性化をとおして…

平成８年１０月２２日（火）

寒河江小学校が、個別化・個性化の実践を通して「一人一人を生かす教育」に取り組んでから今年で１０年目を迎える。節目を迎えた研究実践のまとめの意味もあった発表である。

研究発表は１・２校時にわたって、　○算数科のマスタリーラーニング　○生活科・総合的学習の授業公開が行われた。

マスタリーラーニングは、寒河江小学校がオ

ープンスペースを持った学校として改築した当初から実践を積み重ねている学習システムである。指導の個別化の主たる実践として取り組んでいる。経験を深める中から、コース移動型・コース固定型・融合型・コース自己選択型という４つのパターンを独自に開発して、成果をあげ、多様化に成功している。

生活科・総合的学習には、「子どもの興味関心を重視し、日常生活と関連の深いテーマのもとに、多様な学習内容を構成し、子どもの考える力、行う力、感じる力を育てる学習」として定義し、最終的には、「自己の確立」を目指すとしている。学習の個性化の主たる実践として取り組んでいる。マスタリーと同様の長い歴史のある寒河江小学校の特徴的な学習の一つである。

総合的学習への取り組みは、「さくらんぼ」「二の堰」「米づくり」等の地域の特性を生かした題材を設定し、地域学習としても成果をあげている。寒河江小学校は、改築当時から、個別化個性化の教育に積極的に取り組んできた学校であり、その成果が十分に感じられた発表であった。（佐久間茂和）

②「佐賀県鹿島市立明倫小学校」

佐賀県鹿島市にはすばらしいオープンスペースをもった学校が二校ある。共に数年前に建設され学校で、明倫小学校はその一つで、１０月１７日に公開発表会が開かれた。４００人近い参観者があり、教室の前に広がったワーク・スペースを充分活用した授業を見せてくれた。一年と二年の生活科ではボランティアの方々の活躍がひときわ目立った。お母さんたちによる寸劇「三まいのおふだ」に一年生の子供たちは聞き入った。聞けば、このお母さんたちはボランティア活動として寸劇をいろいろなところで行なっているとのことであった。二年生の生活科では地域のお年寄りの方々による「昔のおもちゃ」づくりであった。三年生以上は算数科と理科の公開授業であったが、すべて体験的な活動を通しての授業であった。まさに、ワーク・スペースなしには展開することができない授業であった。

言うまでもなく、すべての学年がティームを組んで授業に当たっており、しかも、二つ以上の教科を合科しようとしていた。たとえば、一年生の寸劇は国語科に属する活動であるが、この寸劇につなげて算数科を指導しようとしていた。

水山学校長のリーダー・シップのもとに、全

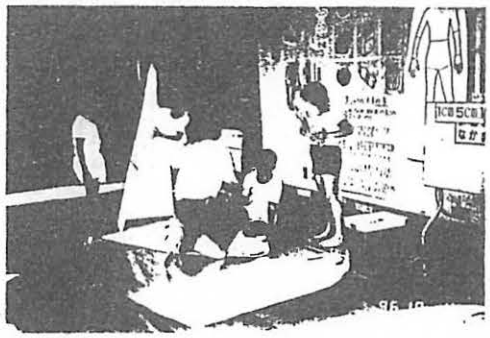
個研の会員であるメンバーによる研究実践の公開であった。秋晴れの素晴らしい日であった。見学に来られた他の学校の先生方にとって大いに参考になったものと信じている。（加藤幸次）

③「東京都台東区立谷中小学校」

文部省がすすめているインテリジェント・スクールのモデル校としても注目されている台東区立谷中小学校の研究発表会が、さる１０月４日多くの参観者を集めて行われた。「自ら考え楽しく学ぶ児童の育成－個を大切にした支援のあり方」を研究主題に、等々力美津子先生を中心として全校職員が一丸となり、全学級公開の迫力ある実践が展開された。

公開授業はどの学年も学年Ｔ・Ｔによる算数科の授業で、１年「かたちのくにへようこそ」２年「長さ図かんを作ろう」、３年「はかりチャンピオンになろう」、４年「広さの鉄人になろう」、５年「谷中タングラムの面積を求めよう」、６年「学芸会の道具を作ろう（立体）」とユニークな単元名となっており、学年フロアに整えられた学習材は、子どもが頭と体をバランスよく働かせて、楽しみながら課題を追究していけるような配慮がなされていた。先生方のアイデアが随所にみられる学習環境整備のレベルの高さは、カメラやビデオを構える参観者の数の多さがそれを物語っていた。

授業では、低学年は活動的・体験的に形や長さ等の概念をつかむことに重点がおかれ、高学



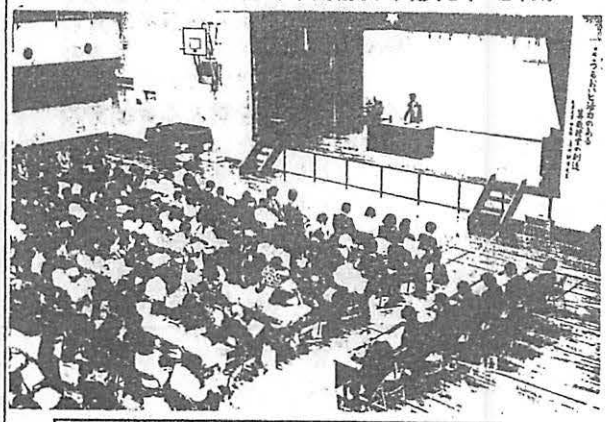
年ではさらに予測や計画・見通しといった抽象的な思考が重視されるなど、子どもの学びの姿を通しての数学的思考の発達の過程や、それに応じた支援の仕方の違いが、みる側にとってもわかりやすく、今後の授業づくりに多いに参考となった。　（佐野　亮子）

④東京都豊島区立高田小学校

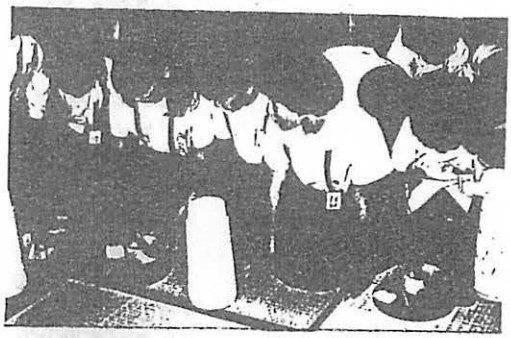
高田小学校は、３、４年生のみ２クラス、全校で８クラスの小規模校である（東京都区内には、この規模が多い）。平成５年度、[redacted]以来、ＴＴによる授業改善を通して、「小規模校のよさを生かした教育課程の創造」について研究をしている。

今回１０月８日の発表では、順序選択学習や自由進度学習、課題選択学習などいろいろなＴＴの形態が学年や単元によって構成され、どの学年の児童も目的意識を持って「自分の学習」に取り組んでいた。５年生が、近くの教育センターのパソコン室や図書室を利用するなど、地域の施設を有効に活用しているのも興味深かった。また、高田小では、全教師が輪番で自分が研修したことについて「研究情報」というプリントにまとめ、月に１回以上発行されている。内容は、先進校の視察や、海外研修、文献での研究などであるが、その質の高さには驚かされる。これらの実践は、平成７年に出版された「小規模校におけるティーム・ティーチングの考え方・進め方」（黎明書房）からもうかがい知ることができる。

全体会では、加藤幸次教授が公演し、これからの教育の方向として、より柔軟な学習環境の中で、子どもたちに自己決定の機会を与え、子どもたちの思いや願いを教師が支援していく必要性を説かれ、ＴＴはその一つの方法であること、その実践の場としてオープンスペースが是非欲しいとまとめられた。　（松浦盛人）



紙面の関係で掲載できないが、以上のほか、全国各地の多数の学校で特色のある、素晴らしい研究発表会が開かれた。



宿泊研修会

12月26・27日、恒例となりつつある、神奈川県箱根での宿泊研修会が行われた。

今回は、ＵＳＡのカリキュラム研究の大御所である、ルイジアナ州立大学のウィリアム・パイナー氏ら４人の研究者と韓国からの留学生も参加し、国際色豊かな研修会となった。

研修テーマは、追跡プロジェクトの内容の確認、総合学習とカリキュラム編成について、が主なものであった。

今回の研修の成果の一端は、総合学習についての２回目の学期研究会の場で生かされるはずである。乞うご期待。　（池田伊三郎）

「学校五日制と教育課程の創造」好評発売中

加藤幸次先生と中澤米子先生が中心となり、「スリム」と「総合学習」をキーワードに２１世紀を展望した教育を考察し、その実践のあり方を述べました。理論面から実践面まで網羅してあり、教育現場が自らの教育課程を模索する際、大きな助けとなる書籍です。黎明書房より平成８年１１月１５日に発売されました。

定価は２８８４円です。

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉
〒115 東京都北区赤羽南1-16-2-504
03-3903-4780 庶務部長　佐久間茂和

全国個性化教育研究連盟会報　第40号
平成９年１月２５日発行
編集責任者　事務局長　高浦勝義
編集　広報部　太田　始